

本号掲載の論文要旨

「紫の上と〈手習〉」

亀田夕佳

『雲隠六帖「雲隠」考

—その表現に見る成立事情—

咲本英恵

『うつほ物語』の和歌における表現の方法
—好忠・順歌との共通語彙を中心に—

内藤英子

『うつほ物語』の主に和歌には、好忠と順の歌との共通語彙が数多くみられる。それらの検討を通して、好忠や順の歌にしかみられない歌語や和歌の修辭、初期定数歌内の「返し」の詠歌方法に似た詠みぶりなどが、『うつほ物語』の和歌にもみられ、二人の歌が『うつほ物語』の表現に様々な形で影響を及ぼしていることを明らかにする。『うつほ物語』は、二人の和歌表現を積極的に作者無記名の物語和歌に用いることで、新しい詠みぶりを模索していたのである。

本論は、若菜上巻の紫の上における手習の場面について、幼少時の文字字びを基点に考察した。紫の上は光源氏の手本を学ぶことによって、光源氏の美意識や価値観を体得し、一人の女君として他者と交流する言葉を獲得しえたが、同じ手習によって自らと光源氏との距離を決定的に自覚させられてしまう。幼少時に光源氏の教育を受けた人物であるがゆえの悲劇が、この女君の独自性として指摘できる。

本稿では、『源氏物語』の偽書『雲隠六帖』の第一帖「雲隠」巻について論じた。一節では、朱雀院の〈松風〉歌について、意味と歴史の変遷を確認し、作者像を想定した。二節では、本帖で語られる「地水火風空」が、真言密教の説く即身成仏に関わる言葉として光源氏の成仏の場面に置かれていることを、表現の問題とともに論じた。三節では、本帖が、『源氏物語』幻巻の光源氏像を引き継いでおり、しかも光源氏像の解釈の位相を様々な映し出した物語であると述べた。

延慶本『平家物語』の女人往生

—善知識の視点から—

横山 知恵

本稿では、延慶本を中心に女人往生の物語を読み解き、物語全体を通して見られる女性たちの往生には、妄念克服のために「善知識」の存在が不可欠であったことを考察した。特に「善知識」の存在を明記した場合と明記しない場合それぞれの立場から、小督と建礼門院の二人を考察の対象として選び、自らの身に起こった「憂きこと」を仏道へと導く「善知識」と捉えた二人の姿勢が、この世での「恨み」を昇華させて妄念の克服につながったとして、その意識が物語全体に行き渡る救済へと結びつくものであったと結論付けた。

『西行物語』の享受方法

—岡部における西行西住伝承—

蔡 佩青

西行説話の生成には、西行歌とその詞書から物語へと展開するという方法がある。『西行物語』においては、旅を修行とみなし仏道に励む西行像を形象するため、様々な独自の西行説話が創出されている。本稿は、略本系『西行物語』に収められている、西行が駿河国岡部宿で同行の修行者の死に遭遇した挿話を中心に、諸本の描写の異同を検討しつつ、現在岡部町に伝わっている西行・西住伝承の方法を考えるものである。

玖也から芭蕉へ

—『道の記』と『おくのほそ道』の連関性—

山田 和則

芭蕉が『おくのほそ道』の旅に出るおよそ二十年も前に、松山玖也は奥羽を旅し、俳諧紀行文『道の記（松山坊秀句）』を残した。この『道の記』と『おくのほそ道』との連関性を考える。その表現が必ずしも一致するというわけではないが、『伊勢物語』の利用や、地名句との関わりにおいて両者に連関が見られることを示し、芭蕉が玖也の影響を受けつつ、それを消化し乗り越えることで『おくのほそ道』を形成した可能性の一端を探る。

折口信夫「身毒丸」の女人

—源内法師の「龍女成仏」—

永井真平

大正六年に発表された折口信夫の「身毒丸」は、説経節の「しんとく丸」に材を取った小説作品であるが、その末尾の附言によって「伝説の研究の表現形式」として読まれてきた。一方、作中の同性愛的モチーフにより折口の性と結びつけた読みもある。本稿は、作品のこの二つの性質が、作中の「龍女成仏品」という経典によって見えてくる説経の中の女性を巡る論理と、折口の個人的な対女性意識とが分かち難く結びついていることの反映であることを示していく。

〔資料紹介〕

「茨木のり子・永瀬清子・杉浦明平、埋もれていた愛知の文学資料の発掘」

—『愛知県史 資料編35』—

近代12 文化』の刊行—

熊谷誠人

平成二十四年三月に『愛知県史 資料編35 近代12 文化』が刊行された。本巻編纂のための調査過程で、茨木のり子や永瀬清子の愛知時代の希少な著作を発掘することができた。また杉浦明平の敗戦前後の日記は『海風』に発表されていたが、その原本を確認することができた。本論では、『愛知県史 資料編35』に掲載された資料の中で、茨木・永瀬・杉浦の三点に絞り、その調査概況を述べながら、それらを掲載した価値について検証した。

日本語社説の文章構造における統括性

—提題表現と叙述表現に注目して—

Didik Nurhadi

本稿の目的は、日本語における統括性が文章の全体的構造に見いだされる文の集合や段落の相互関係によってどのように形成されるかについて具体的指標を用いて明確にし、かつ統括性に基づいてどのように全体的構造を類型化できるかについて考察することである。先行論を援用し、提題・叙述表現からみた文章の文脈展開形態の特徴と分布の様相を観察すると、日本語の文章構造にはA型、D型といった分類が提案できる。3紙の新聞社説を考察した結果、A型が50%で最も多く、次いでB型が40%で、これらの文章型が合わせて90%を占めている。この結果か

ら、日本語においては、本稿でいうA型、終了部のみで主張がなされるものと、B型、開始部・終了部の双方で結論となる主張が示されるものが二大類型であることは、日本語文章の傾向として特筆すべき整理といえる。本稿の提案は、他言語との対照においても考察・検証が必要とされる。

上代における終助詞カの意味変化とカ文の構造変化

小出祥子

上代における終助詞カと、カが文末に現れる文を考察した結果、カの意味的機能とカ文の構文構造が万葉集前期（～七〇九年）と後期（七一〇年～）で、変化していることを明らかにした。

前期の力は、「承認」機能を担い、後期の力は、「判断保留」機能を担う。承認とは、喚体的なモノを述体としてのコトとして述べる機能であり、「判断保留」とは、述体としてのコトを喚体的なモノとしてまとめる機能である。この変化は、カのスコープの拡大によって説明できることを示した。